

## 嘘泣きと向社会的行動の関連

一心の理論に着目してー

黒 岩 悠 [鹿児島大学大学院教育学研究科]  
島 義 弘 [鹿児島大学教育学部(教育心理学)]

### Does theory of mind mediate pretend cry and prosocial behavior?

KUROIWA Haruka, SHIMA Yoshihiro

キーワード：嘘泣き、向社会的行動、心の理論

#### 問題・目的

子どもは、乳児の頃から、泣きなどのネガティブな感情表出を巧みに利用して、養育者と関わっているように思われる。泣きの表出は、発達初期の対人コミュニケーションにおいて重要な働きを果たしている。泣きを含む悲しみに伴う表出は、他個体に、表出個体が重要な対象の喪失などの事態に遭遇していることを知らせ、保護や慰撫を引き出す(遠藤, 1995)。泣きは、生後9か月頃から手や腕の参照的なジェスチャーを伴って要求を伝える機能を持つようになる(Fogel & Thelen, 1987)。Reddy(1991)は、生後8カ月の乳児が、ミルクを欲しいときに泣くふりをする(涙は流さず泣いているかのように大声を出す)という両親の報告を紹介している。また2歳児が、母親から援助(なぐさめ)を引き出すために、母親の方を向いているときには悲しみを多く表出することも示されている(Buss & Kiel, 2004)。

日本の発達研究においては、近年、インタビュー法を用いて子どもの感情理解にアプローチする手法が見られる。インタビュー法を用いた久保(2006)では、5歳児では参加児の半数が、6歳児ではその大半が、悲しみの表出の機能として「それに接した者の共感的な感情を惹起し、表出者への向社会的な行動を促すこと」を語ることを見出している。これに倣って溝川(2007)も4、5、6歳児を対象としたインタビュー調査を実施し、嘘泣きの表出者に対して、嘘泣きと本当の泣きを区別することのできる幼児のうち、約4割が「嘘泣きの表出者に対して向社会的行動を取る(どうしたのと聞く、助けてあげる、一緒に遊ぼうと言う等)」と語り、

約3割が「否定的・非関与的行動を取る(嘘泣きしてはだめだと言う、助けてあげない、何もしない等)」と語ることを見出した。一方で本当の泣きの表出者に対しては、大半が「向社会的行動をとる」と判断することが示された。

向社会的行動とは、他者あるいは他者集団を助けようとしたり、ためになることをしようとする自発的な行為である(Eisenberg & Mussen, 1989)。24カ月までに、子どもは他者の苦痛の表出(泣く、困る等)に対して、向社会的行動(なぐさめ、物を渡す、元気づける)をするようになる(Zahn-Waxler & Radke-Yarrow, 1982)。また、2歳頃から向社会的行動の頻度が増加し(Radke-Yarrow, Zahn-Waxler, & Chapman, 1983)、就学前になると、子どもたちは他者の嘘泣きに対しても時に向社会的行動を取ると判断するようになる(溝川, 2009)。この時、心の理論を獲得していると、嘘泣きの受け手は「本当に泣いている」という誤信念を抱くため、嘘泣きの表出者に対して向社会的行動を取るだろうと判断できるようになるとも考えられる。

そこで本研究では、心の理論に着目しながら嘘泣きと向社会的行動の関連を検討する。心の理論とは、「AさんはXと思っている」ことが理解できることであるが、こうした他者の心の理論は「Aさんは『BさんはYと思っている』と思っている」という入れ子構造をとることができる(溝川, 2013)。一般に、前者を心の理論(もしくは一次の心の理論)、後者を二次の心の理論と呼んでいる。溝川・子安(2008)では、見かけの泣きが生む他者の誤信念の理解は二次の心の理論と関連するこ

とが示唆されている。このことから、心の理論が発達するにつれて「嘘泣きが向会的行動を引き出す」ことの理解が進むものと考えられる。また、心の理論が発達するにつれて、より高度に心的状況を読み取れることから、状況に応じた行動を取れるようになると思われる。

本研究の仮説は以下の通りとする。

仮説1. 心の理論が未獲得の場合、表出者の泣きが本当の泣きである理解していなければ、受け手が向社会的行動をとらないと考える。理解していれば、受け手が向社会的行動をとらないと考える。

仮説2. 心の理論を獲得していれば、泣きの受け手は泣きが嘘泣きであっても本当の泣きであっても向社会的行動をとると考える。

仮説3. 心の理論を獲得している方が、泣きの受け手がストーリーによりふさわしい行動をとると考える。

## 方法

### 実験対象者

A県内の幼稚園に通う、年少児19名(男児9名、女児10名)、年長児20名(男児10名、女児10名)、A県内の小学校に通う、1年生19名(男児10名、女児9名)、2年生26名(男児13名、女児13名)に対して、幼稚園・小学校の一室を借り、個別で実験を行った。

### 実験課題と実験手続き

溝川(2009)を参考に、誤信念課題2問(一次の誤信念課題1問、二次の誤信念課題1問)を、溝川(2011)を参考に、泣きのストーリー課題4問(見かけの泣き2問、本当の泣き2問)を用意した。誤信念課題は、一次の誤信念課題に正答した者のみ二次の誤信念課題も行った。実験は、誤信念課題と泣きのストーリー課題2問(見かけの泣き1問、本当の泣き1問)を行う順番を無作為に変えることで、カウンターバランスがとられた。それぞれの課題の材料と実験手続きは以下の通りである。なお実験所要時間は、15~20分程度であった。

### 誤信念課題

道具には紙芝居を用意し、次のようなストーリーを提示した。

**一次の誤信念課題** 「①ヨウコさんとヒロシくんがいます。ヨウコさんは、お人形で遊んだあと、それを赤いかごの中にしまって、部屋を出ました。②ヨウコさんがいない間に、ヒロシくんが、赤いかごからお人形を出して遊びました。③ヒロシくんは、お人形で遊んだあと、青い箱にしまいました。④ヨウコさんが、もう一度お人形で遊ぼうと思って、部屋にやってきました。」その後、信念質問「ヨウコさんは、どこを探しますか」、本当質問「本当は、どこにお人形はありますか」、記憶質問「最初、ヨウコさんはお人形をどこにしまいましたか」の3つの質問を行った。この3つの質問に全て正答した場合を一次の誤信念課題正答とした。

**二次の誤信念課題** 「①ヨウコさんとヒロシくんがいます。ヨウコさんは、お人形で遊んだあと、それを赤いかごの中にしまって、部屋を出ました。②ヨウコさんがいない間に、ヒロシくんが、赤いかごからお人形を出して遊びました。③ヒロシくんは、お人形で遊んだあと、青い箱にしまいました。それをヨウコさんが窓から見えていましたが、ヒロシくんは気付いていません。④ヨウコさんが、もう一度お人形で遊ぼうと思って、部屋にやってきました。」その後、信念質問「ヒロシくんは、ヨウコさんがどこを探すと思っていますか」、本当質問「本当は、ヨウコさんはどこを探しますか」、記憶質問「最初、ヨウコさんはお人形をどこにしまいましたか」の3つの質問を行った。この3つの質問に全て正答した場合を二次の誤信念課題正答とした。

### 泣きのストーリー課題

ストーリーは、ボール遊びストーリーとお絵かき遊びストーリーの2つの課題を使用した。どちらのストーリーも本当の泣きのストーリーと嘘泣きのストーリーがある。

**ボール遊びストーリー** 本当の泣きの場合は、「①アキトくんがお外で一人で遊んでいます。②お友だちはみんなでボール遊びをしています。アキトくんは一緒に遊びたいと思い、お友達がボールで遊んでいるのをじっと見つめました。③アキトくんはとても悲しくなりました。④アキトくんはとうとう泣いてしまいました。エーン。⑤お友だちがアキトくんの目の前にきました。」というストー

リーを使用した。嘘泣きの場合は、上記のストーリーの③を「アキトくんはちょっと泣くふりをしてみようと思いました。」、④を「アキトくんは泣くふりをしています。エーン。」とした。

その後、内容質問「お友だちは何で遊んでいましたか」「アキトくんは、お友だちが遊んでいるのを見てどう思いましたか」、本当質問「アキトくんは、本当に泣いていますか、それとも本当は泣いていないですか」、他者行動質問「この後、お友だちはアキトくんにどうしますか A. 大丈夫、泣かないでと言う B. 泣き虫、赤ちゃんみたいと言う C. ボールと一緒に遊ぼうと言う D. 何も言わない」「なぜその行動を選びましたか」の5つの質問を行った。

**お絵かき遊びストーリー** 本当の泣きの場合は、「①マコトくんはお部屋で赤い色のペンでお絵かきをしています。②お友だちは青色のペンでお絵かきをしています。マコトくんは青色のペンの方が素敵だなと思い、お友だちが青色のペンを使っているのをじっと見つめました。③マコトくんはとても悲しくなりました。④マコトくんはどうも泣いてしまいました。エーン。⑤お友だちがマコトくんの目の前にきました。」というストーリーを使用した。嘘泣きの場合は、上記のストーリーの③を「マコトくんはちょっと泣くふりをしてみようと思いました。」、④を「マコトくんは泣くふりをしています。エーン。」とした。

その後、内容確認質問「お友だちは何色のペンで描いていますか」「マコトくんは、青色のペンを使っているのを見てどう思いましたか」本当質問「マコトくんは、本当に泣いていますか、それとも本当は泣いていないですか」他者行動質問「この後、お友だちはマコトくんにどうしますか A. 大丈夫、泣かないでと言う B. 泣き虫、赤ちゃんみたいと言う C. このペン使うと聞く D. 何も言わない」「なぜその行動を選びましたか。」の5つの質問を行った。

**結果**

**心の理論と泣きの理解の学年による検討**

**心の理論** 心の理論の獲得段階ごとの人数を学年別に集計し、Table 1に示した。学年と心の理

論の獲得段階との関連をカイ二乗検定で検討した結果、有意な偏りが見られた ( $\chi^2(6)=47.00, p<.001$ )。残差分析の結果、年少児において心の理論未獲得の者が多く ( $p<.01$ )、二次の心の理論を獲得している者は少なかった ( $p<.05$ )。また、2年生において心の理論未獲得の者が少なく ( $p<.01$ )、二次の心の理論を獲得している者は多かった ( $p<.05$ )。

**Table 1 学年別における心の理論獲得段階ごとの人数**

心の理論	未獲得	一次	二次
年少児	16	3	0
年長児	5	11	5
1年生	2	9	8
2年生	0	12	14

**本当の泣き** 他者の表出した泣きが本当の泣きであると理解できた者と理解できなかった者の人数を学年別に集計し、Table 2に示した。学年と本当の泣きの理解の関連をカイ二乗検定で検討した結果、有意な差は認められなかった ( $\chi^2(3)=2.67, n.s.$ )。

**Table 2 学年別における本当の泣きの理解**

本当の泣き	不理解	理解
年少児	4	15
年長児	7	14
1年生	6	13
2年生	4	22

**嘘泣き** 他者の表出した泣きが嘘泣きであると理解できた者と理解できなかった者の人数を学年別に集計し、Table 3に示した。学年と嘘泣きの理解の関連をカイ二乗検定で検討した結果、有意な差が見られた ( $\chi^2(3)=22.33, p<.001$ )。残差分析の結果、年少児において嘘泣きを理解していなかった者が多かった ( $p<.01$ )。

**Table 3 学年別における嘘泣きの理解**

嘘泣き	不理解	理解
年少児	9	10
年長児	1	20
1年生	1	18
2年生	1	25

## 泣きの理解と向社会的行動

他者行動質問4つの選択肢のうち、「A. 大丈夫、泣かないでと言う」「C. ボールで一緒に遊ぼうと言う；このペン使うと聞く」の2種類の選択肢を向社会的行動とし、「B. 泣き虫、赤ちゃんみたいと言う」「D. 何も言わない」の2種類を非向社会的行動とした。また、「C. ボールで一緒に遊ぼうと言う；このペン使うと聞く」をストーリーに沿う向社会的行動とし、「A. 大丈夫、泣かないでと言う」をストーリーに沿わない向社会的行動とした。

なお、実験では選択理由も聞いているが、本文では検討しない。

## 本当の泣きの理解

**心の理論獲得段階別の向社会的行動** 他者行動質問に対して向社会的行動を取ると回答した者と非向社会的行動を取ると回答した者の人数を、他者の表出した泣きが本当の泣きであると理解できたか否かと心の理論の獲得段階別に集計し、Table 4に示した。心の理論未獲得の実験参加者において、泣きの理解と、他者行動質問に対して向社会的行動を取ると回答した者と非向社会的行動を取ると回答した者との比率の関連をカイ二乗検定で検討した結果、有意な差は見られなかった ( $\chi^2(1)=0.77$ , n.s.)。心の理論の一次を獲得しているもの、心の理論の二次を獲得しているものは、泣きの理解に関わらず、全員が向社会的行動を選択した。

**心の理論獲得段階別の向社会的行動内容** 他者行動質問に対してストーリーに沿う向社会的行動を取ると回答した者とストーリーに沿わない向社

会的行動を取ると回答した者の人数を、他者の表出した泣きが本当の泣きであると理解できたか否かと心の理論の獲得段階別に集計し、Table 5に示した。心の理論獲得段階ごとに泣きの理解と、他者行動質問に対してストーリーに沿う向社会的行動を取ると回答した者とストーリーに沿わない向社会的行動を取ると回答した者との比率の関連をカイ二乗検定で検討した結果、心の理論未獲得と一次の心の理論が獲得している場合において有意な差は認められなかった (未獲得:  $\chi^2(1)=0.24$ , n.s.; 一次:  $\chi^2(1)=0.21$ , n.s.)。二次の心の理論を獲得している場合においては、期待値が5未満であるため、Fisherの直接確率法で検定を行った結果、本当の泣きを理解していなければ、ストーリーに合わない向社会的行動をとることが有意に低い傾向 ( $p<.05$ ) が見られた。

## 嘘泣きの理解

**心の理論獲得段階別の向社会的行動** 他者行動質問に対して向社会的行動を取ると回答した者と非向社会的行動を取ると回答した者の人数を、他者の表出した泣きが嘘泣きであると理解できたか否かと心の理論の獲得段階別に集計し、Table 6に示した。心の理論獲得段階ごとに泣きの理解と、他者行動質問に対して向社会的行動を取ると回答した者と非向社会的行動を取ると回答した者との比率の関連をカイ二乗検定で検討した結果、心の理論未獲得の場合には有意な差は見られなかった ( $\chi^2(1)=0.29$ , n.s.)。一次の心の理論を獲得している場合にのみ、期待値が5未満であるため、Fisherの直接確率法で検定を行った結果、嘘泣きを理解していなければ、非向社会的行動が有意に高く

Table 4 心の理論獲得段階における本当の泣きの理解と行動の回答者数

心の理論	未獲得		一次		二次	
	不理解	理解	不理解	理解	不理解	理解
泣きの理解						
向社会的行動	6	15	10	25	5	22
非向社会的行動	0	2	0	0	0	0

Table 5 心の理論獲得段階における本当の泣きの理解と向社会的行動内容

心の理論	未獲得		一次		二次	
	不理解	理解	不理解	理解	不理解	理解
泣きの理解						
ストーリーに沿う	5	11	9	21	5	13
ストーリーに沿わない	1	4	1	4	0	9

( $p<.05$ )、嘘泣きを理解していれば、向社会的行動が有意に高かった ( $p<.05$ )。二次の心の理論を獲得している場合においては、嘘泣きであると理解していない参加者がいなかったため、 $1 \times 2$ の直接確率計算を行った結果、有意な差が見られた ( $p<.01$ )。

**心の理論獲得段階別の向社会的行動内容** 他者行動質問に対してストーリーに沿う向社会的行動を取ると回答した者とストーリーに沿わない向社会的行動を取ると回答した者の人数を、他者の表出した泣きが嘘泣きであると理解できたか否かと心の理論の獲得段階別に集計し、Table 7に示した。心の理論獲得段階ごとに泣きの理解と、他者行動質問に対してストーリーに沿う向社会的行動を取ると回答した者とストーリーに沿わない向社会的行動を取ると回答した者との比率の関連をカイ二乗検定で検討した結果、心の理論未獲得の場合と一次の心の理論を獲得している場合において有意な差は認められなかった（未獲得： $\chi^2(1)=0.43$ , n.s.；一次： $\chi^2(1)=0.92$ , n.s.）。二次の心の理論を獲得している場合においては、嘘泣きの理解であると理解していない参加者がいなかったため、 $1 \times 2$ の直接確率計算を行った結果、有意な差は見られなかった (n.s.)。

### 考察

#### 心の理論の獲得段階における泣きの理解と向社会的行動

本研究では、心の理論未獲得の場合、本当の泣きのストーリーであっても、嘘泣きのストーリーであっても、他者行動質問に対して向社会的行動

を取ると回答した者と非向社会的行動を取ると回答した者との比率には有意な差が見られず、仮説1は支持されなかった。現在のところ、見かけの感情と本当の感情を区別する能力が、他者と相互に影響し合っているとの報告は非常に少ない (Cassidy, Werner, Rourke, Zubernis, & Balaraman, 2003)。しかし、1990年代から、「心の理論」の獲得の1つの指標とされる誤信念課題への通過が、社会的相互作用の発達と密接に関わることを示唆するいくつもの研究結果が示されている (Repacholi & Slaughter, 2003)。本研究において、仮説1が支持されなかった理由の1つとして、心の理論が未獲得の者は、まだ向社会的行動のような社会的相互作用の機能が発達していなかったことが考えられる。

本研究において、仮説2は本当の泣きの場合と嘘泣きでは二次の心の理論を獲得している場合においてのみ、支持される結果となった。一次の心の理論を獲得している場合は、嘘泣きを理解していなければ、非向社会的行動が有意に高い傾向が、嘘泣きを理解していれば、向社会的行動が有意に高い傾向が見られた。しかし、まず一次の心の理論を獲得しているにも関わらず、嘘泣きを理解できないという結果であることに少し疑問が残る。また、本当の泣きを理解していても、理解していても向社会的行動をとることが示された。

二次の心の理論を獲得している場合においては、本当の泣きにおいても嘘泣きにおいても、また、泣きの理解、不理解に関わらず、泣いている主人公に対して泣きの受け手は向社会的行動をとると考えることが示された。これは、一次の心の理論

Table 6 心の理論獲得段階における嘘泣きの理解と行動回答者数

心の理論	未獲得		一次		二次	
	不理解	理解	不理解	理解	不理解	理解
泣きの理解						
向社会的行動	5	11	2	29	0	26
非向社会的行動	3	4	2	2	0	1

Table 7 心の理論獲得段階における嘘泣きの理解と向社会的行動内容

心の理論	未獲得		一次		二次	
	不理解	理解	不理解	理解	不理解	理解
泣きの理解						
ストーリーに沿う	4	7	1	23	0	14
ストーリーに沿わない	1	4	1	4	0	12

を獲得している場合の本当の泣きのストーリーから得られた結果も含め、泣いている者に対しては向社会的行動をとるべきであるという規範意識を持っていると考えられる。特に泣きが本当の泣きであった場合、心の理論を獲得している者は泣きに対して向社会的行動をとると考えることが示された。

#### 心の理論の獲得段階における泣きの理解と向社会的行動内容

一次の心の理論とは、「AさんはXと思っている」ことの理解ができることであり、二次の心の理論とは、「Aさんは、『BさんはYと思っている』と思っている」といった入れ子構造の形式をとる理解ができることである。その二次的な心的状態の理解の発達、見かけの泣きが生む誤信念の理解（例えば、「見かけの泣きによって、他者が『主人公はおもちゃがないと思って泣いている』と思込む」ことの理解）における発達の变化が児童期に見られるという予測の根拠となる。溝川・子安（2008）では、見かけの泣きが生む他者の誤信念の理解は二次の誤信念の理解と関連することが示唆されている。そのため、見かけの泣きが生む誤信念の理解とストーリーによりふさわしい行動を選択することは、関係すると考え、仮説3を立てた。しかし、本研究において、本当の泣きにおいても嘘泣きにおいても全ての心の理論の獲得段階で、泣きの理解、不理解に関わらず、よりストーリーにふさわしい向社会的行動をとると考えるとは限らないことが示された。つまり、仮説3は支持されない結果となった。このような結果が出た1つの要因として、ストーリーに沿わないとした向社会的行動内容（大丈夫、泣かないでと言う）がストーリー上、不自然ではないことが考えられる。「なぜその行動を選んだのか」という質問に対して、「泣いている子がいたら、まずどうして泣いているのか聞きます。」（小学校2年生女子）というような発言が挙がっていたことからもうかがえる。

#### 今後の展望

本研究では、溝川（2011）の研究を参考に泣き課題のストーリーの絵をつくり、紙芝居のような形式で使用した。泣きの理解を測る本当質問の際、実験対象者の中には「これは、顔を隠しているだけ。

涙が出ていないから泣いてない。」（幼稚園年長男子）といったように、ストーリーの内容ではなく、絵に注目した者もいた。このような影響がでてしまったことでストーリーによる泣きの理解として正しい結果が出ていない可能性が考えられる。

溝川（2009）では、幼児を対象としたインタビュー調査を実施し、嘘泣きと本当の泣きを区別することができる幼児のうち、約4割が「嘘泣きの表出者に対して向社会的行動をとる」と語り、約3割が「否定的・非関与的行動をとる」と語ることを見出した。しかし、この溝川（2009）や Mizokawa & Koyasu（2011）の研究からも、幼児のなかにも「嘘泣きはよくないこと」等、嘘泣きに対して否定的な評価を抱いている者もいることが示唆されている。本研究においても、嘘泣きのストーリーを読み上げた際に「えー。嘘泣きしてるー。」（幼稚園年長女子）といった発言があったり、泣きの受け手の行動を選択してもらう際に、本当の泣きの時はすぐに向社会的行動をとると選択したが、嘘泣きの時は「嘘泣きだからなあ。迷うな。」（小学2年生男子）という発言があった。また、嘘泣きに対して向社会的行動を選んだ実験対象者のなかにも「嘘泣きって気づいてないからこれ（向社会的行動の絵を指す）。でも、もし嘘泣きって気づいたら、これ（非向社会的行動の絵を指す）。声もかけない。」（小学1年生男子）という答えも挙がった。このように嘘泣きに対して良い印象を抱いていないことは、私たちの中にある道徳的判断が関係していると考えられる。これらのことより、今後の研究の展望として、子どもたちの嘘泣きに対する道徳的判断と嘘泣きに対する行動の判断の関係を明らかにしていく必要があると考える。この研究により、子どもたちの嘘泣きを用いたコミュニケーションの位置づけの理解を深めることができると考えられる。

#### 引用文献

- Buss, K. A., & Kiel, E. J. (2004). Comparison of sadness, anger and fear facial expressions when toddlers look at their mothers. *Child Development*, **75**, 1761-1773.
- Cassidy, K. W., Werner, R. S., Rourke, M.,

- Zubernis, L. S., & Balaraman, G. (2003). The relationships between psychological understanding and positive social behavior. *Social Development*, **12**, 198-221.
- Eisenberg, N., & Mussen, P. H. (1989). *The roots of prosocial behavior in children*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 遠藤利彦 (1995). 乳幼児期における情動の発達とはたらき 麻生武・内田伸子 (編著) 講座生涯発達心理学2 人生への旅立ち—胎児・乳児・幼児前期—. 金子書房, pp.129-162.
- Fogel, A., & Thelen, E. (1987). Development of early expressive and communicative action: Reinterpreting the evidence from a dynamic systems perspective. *Developmental Psychology*, **23**, 747-761.
- 久保ゆかり (2006). 幼児期における感情表出についての認識の発達—5歳から6歳への変化— 東洋大学社会学部紀要, **44**, 89-105.
- 溝川 藍 (2007). 幼児期における他者の偽りの悲しみ表出の理解の発達 発達心理学研究, **18**, 174-184.
- 溝川 藍 (2009). 幼児期における嘘泣きについての認識の発達 京都大学大学院教育学研究科紀要, **55**, 117-129.
- 溝川 藍 (2011). 4、5歳における嘘泣きの向社会的行動を引き出す機能の認識 発達心理学研究, **22**, 33-43.
- 溝川 藍 (2013). 幼児期・児童期の感情表出の調整と他者の心の理解—対人コミュニケーションの基礎の発達— ナカニシヤ出版
- Mizokawa, A., & Koyasu, M. (2007). Young children's understanding of another's apparent crying and its relationship to theory of mind. *Psychologia*, **50**, 291-307.
- 溝川 藍・子安増生 (2008). 児童期における見かけの泣きの理解の発達：二次的誤信念の理解との関連の検討 発達心理学研究, **19**, 209-220.
- Radke-Yarrow, M., Zahn-Waxler, G., & Chapman, M. (1983). Children's prosocial dispositions and behavior. In P. H. Mussen (Ed.), *Handbook of child psychology*, Vol. 4. New York:Wiley. pp. 469-545.
- Reddy, V. (1991). Playing with other's expectations: Teasing and mucking about in the first year. In A. Whiten (Ed.), *Natural theories of mind: Evolution, development and simulation of everyday mind reading*. Oxford: Basil Blackwell. pp. 143-158.
- Repacholi, B. M., & Slaughter, V. (Eds.) (2003). *Individual differences in the theory of mind*. New York: Psychology Press.
- Zahn-Waxler, C., & Radke-Yarrow, M. (1982). The development of altruism: Alternative research strategies. In N. Eisenberg (Ed.), *The development of prosocial behavior*. New York: Academic Press. pp. 109-138.